Information

あなたの想いを、未来へつなぐ「遺贈寄付」

近年、「遺贈寄付」に関するご相談が増えています。
ご家族や身近な方への想いを大切にしながら、
将来遺される財産の一部を、未来に生きる子どもたちや
人びとのために役立てるという選択が、少しずつ広がっています。

Q. まとまった財産でないとできないでしょうか？

A. 遺贈寄付というと、多額の財産を思い浮かべる方も多いかもしれませんが、ご寄付の額はご任意です。
財産の一部だけを遺贈することもできます。

Q. 老後にどのくらいお金が必要になるか分からず、不安です。

A. 老後の生活に必要なお金を使ったうえで、将来的に財産が残った場合に遺贈する、という形の遺言にすることもできます。

遺贈寄付の流れや留意点などをまとめた
「遺贈パンフレット」を無料でお送りしております。
ご希望の方には「エンディングノート」も
お届けいたします。
お気軽にお問い合わせください。

【資料請求・お問い合わせ】
TEL：0120-496-819
受付時間9:00～18:00（通話料無料・年始を除く年中無休）
メール：legacy@jawfp.org
FAX：045-522-1684

「レッドカップキャンペーン」はおかげさまで15周年を迎えました！

Anniversary! 15th レッドカップキャンペーン

マリウス葉さんと一緒に学びましょう

「15周年オフィシャルサポーター」に就任したマリウス葉さんが世界の飢餓問題や国連WFPの学校給食支援についてわかりやすく紹介していきます。10月からさまざまな媒体で発信していきますので、ぜひご注目ください。

- ●10月1日、雑誌『ビッグイシュー日本版』にインタビュー記事が掲載
- ●10月16日、YouTubeチャンネル「COCHO COCHO」に登場

SNS投稿でプレゼント当選のチャンス

10月上旬から11月にかけて、国連WFP協会のSNSに全7本の動画を順次配信していきます。
この動画を観て感じたことや世界の飢餓について自分にできるアクションを、国連WFP協会の公式X、またはInstagramをフォローし、
「#レッドカップキャンペーン」をつけてSNSに投稿・拡散してください。
抽選でマリウス葉さんのサイン入りポストカードや
レッドカップキャンペーン対象商品の詰め合わせをプレゼントします！

「レッドカップキャンペーン」とは …… 対象商品を購入すると、売り上げの一部が国連WFPの学校給食支援に寄付されます。2011年の開始以来、2025年末までに約3,656万人の子どもたちに学校給食を届けることができました。

レッドカップキャンペーンの対象商品、
マリウス葉さんによる活動の最新情報は
こちら▼

https://www.jawfp.org/redcup/

世界食糧計画（WFP）日本事務所
認定NPO法人国連WFP協会
https://ja.wfp.org/

ご寄付はこちら

ご意見・お問い合わせ
0120-496-819
受付時間 9:00～18:00
（通話料無料・年始を除く年中無休）

お問い合わせフォーム
https://jawfp.my.site.com/workplace/s/Contact

家族とともに畑を訪れたアブナーくん。地域の農家は、WFPの支援で導入されたデジタル温度計で土壌温度を測定し、データを共有しながら、地域の気候変化に対応した農業に取り組んでいます。

WFP World Food Programme

飢餓から救う。
未来を救う。
SAVING LIVES CHANGING LIVES

国連の食料支援機関

国連WFPニュース

Oct. 2026 Vol.80

予測する。備える。命をつなぐ。

予測する。
備える。
命をつなぐ。

WFPは依然、深刻な資金不足に直面しています。
だからこそ、限られた資金を最大限に生かすため、最新の技術や工夫を一層取り入れ、支援のあり方を進化させています。
将来起きる気候変動による影響を『予測し、備える』という、新たな支援の形をご紹介します。

「こんな干ばつは見たことがない。」と話すケニアに住むエチャカンさん（75歳）

ラオス

モニタリングで気象災害を予測　地域の対応力を強化

ラオスは経済成長の一方で貧富の格差が拡大し、貧困層を中心に10世帯に1世帯が食料不安の状態に陥っていると推定されます。特に小規模農家の多い山間地域は、雨期に洪水や土砂崩れに見舞われ、大きな被害が出ることもしばしばです。

このためWFPは政府と連携して、降雨量や異常気象を継続的にモニタリングし、災害を予測する仕組みを設けました。その上で早期警報システムや防災対策を整備し、農作物などへの被害を最小限に食い止めようとしています。また政府や農民団体、民間団体と連携して、小規模農家に気候変動に強い農業を広める活動などにも取り組んでいます。さらに政府と共同で、地域ごとの食料不安のリスクを分析し、支援を必要とする人々を把握する取り組みも進めています。

こうした活動は、地域の災害時の対応力や回復力を高め、立場の弱い小規模農家を守ることにつながります。

動画を見る
パソコンから▼
https://youtu.be/x64E9VsZUkg

ラオスの地図をもとに、地域ごとの災害リスクを分析。気象データを活用し、被害を最小限に抑えるための対策につなげています。

「もしもの食料不足」に備える、ライスバンク

WFPがラオスで支援する制度のひとつに、地域の米を備蓄する「ライスバンク」があります。災害などで食料が不足した時、各家庭がライスバンクから米を借りて当座の食料を確保し、収穫後に少額の利子とともに返済する仕組みです。
日本では昨年、米不足や価格高騰が発生し、「お米を食べる量を減らしている」といった声がニュースでも取り上げられました。日本では、このような事態によってすぐに食料が全く手に入らなくなるわけではありませんが、食料の不足が命に関わる問題となる国や地域が数多くあります。
WFPはそうした国や地域で、次の危機にも備えられる仕組みづくりを支援しています。

ライスバンクからお米を運ぶ人びと。

「予測し、備える」支援は、限られた資金でより多くの命を守るために有効な取り組みです。
しかし、資金不足により、こうした支援を必要とするすべての地域へ広げることはできていません。

イルアタ・ロブヤさん

南スーダン

「太陽がすべてを焼き尽くしている」

気候変動による干ばつや洪水などの影響を受ける地域では、今この瞬間も人びとが深刻な飢餓に苦しんでいます。WFPとFAOの最新の報告書によると干ばつや紛争により、2026年半ばには人口の55%に当たる780万人が、深刻な食料不安に陥ると懸念される南スーダン。その東部に住むイルアタ・ロブヤさんは、「太陽がすべてを焼き尽くしてしまい、私たちは何もできず空腹に苦しんでいます」と訴えます。

以前は農業を営んでいましたが、雨が降らず作物が育たなくなってしまいました。主食のソルガムも手に入らず、今は森に自生するわずかなか果物を採って命をつないでいます。
「できる限り果物を集めていますが、それもなくなりつつあります。この空腹をどうすればいいのでしょう？私たちにできるのは、ただ雨を待つことだけです。もし助けてくれる人がいるのなら、どうか助けてください」

こうした人びとを危機から救うためには、みなさまからのあたたかいご支援が不可欠です。ぜひご協力をお願いいたします。